

発達障害

岩波 明 著

日頃生徒指導する中で、生徒が突然「キレ」たり、「まわりの空気がよめない」場面に接することがある。これらの行動を単なる問題行動として扱うのではなく、「発達障害」として正しくとらえる対応が必要な場面もある。

一般に「発達障害」は、生まれつきのものであり、大人になってから発症するものではない。

本書の導入では、かの有名な「シャーロック・ホームズ」(ドラマ版)を取り上げ、非常識な行動をしたり他者に対し配慮に欠けることがあるものの、抜群の記憶力があり、その力が犯罪捜査に有用で成果を上げた、まさに彼は「高機能のアスペルガー症候群」と紹介している。

第1章の「ASD(自閉スペクトラム障害)」では「コミュニケーションと対人関係の持続的な欠陥」及び「限定され反復的な行動・興味・活動」などに見られる障害で、対人関係などに強いこだわり症状を示すことを事例を挙げて紹介している。

初診時25歳の男性の場合、幼児期から小学校時代は「変わり者」と言われ、中高校時代では思ったことを直ぐに口に出しひんしゆくを買ったが、数学と理科は得意で、大学院を出て就職。仲間や上司とはうまくいかなかった。このASDの原因は明らかではないが、家族内の発症率は高く、遺伝的な要因が大きいとしている。

第2章「ADHD(注意欠陥多動性障害)」では、この疾患が小児期の総人口の5～10%程度に及び、前記のASDの10倍以上であるとしている。このADHDである「不注意、集中力の障害」は、古くは子供の病気で、成人すれば症状が改

善すると考えられていたが、成人期になっても持続し、仕事上のケアレスミスの頻発や仕事上のパフォーマンスの低下など否定的な要因が紹介されている。ADHDの症状である、不注意・多動と衝動性について項目立てて詳しく述べられている。

第3章「ASDとADHDの共通点と相違点」では、両者の表面上の症状は、小児期の情報が少ないと区別は困難とし、「対人関係が苦手な人」や「少し変わったところがあり、周囲から浮いた人」をASDと決めつける傾向など、いろいろな事例が紹介されている。

第4章「映像記憶、共感覚、学習障害」では、ASDやADHDに見られる特異な症状として、発達障害や知的障害を持つ人が突出した天才的な才能をもつ事例とその要因について記され、ASD患者の大学生が講義の内容をDVDのように再生することができる例も紹介されている。

第5章「天才」では、自然科学や芸術の分野では、常人とかけ離れた過剰な記憶力や集中力を持つ人にASDの特徴が見られる人が多いとし、有名人の事例が述べられている。

第6章「アスペルガー症候群への誤解はなぜ広まったか」では、実際に起こった高校生の老女殺人事件と小学校6年生の同級生殺人事件の精神鑑定を専門医の立場から分析している。

第7章「発達障害と犯罪」では、犯人の刑罰減免のために「発達障害」という病名が乱用され、発達障害に対する偏見を助長したとし、ASDのレイプ事件、ADHDの通り魔事件について見解が述べられている。

第8章「発達障害を社会に受け入れるには」では、「自分の立場をわきまえ、空気や雰囲気を読んで行動する」ことが苦手な発達障害者を支援する「発達障害者支援法」が2005年から施行されたことが紹介されている。

(文春新書、255頁、820円+税) (山下省蔵)